# ともしび

## 阿弥陀如来のお慈悲

井上直之（釋直道）

去年の話ですが、仕事を終えて車を運転して帰宅している最中、横から来た車に「ドン」とぶつけられてしまいました。その時すぐに相手を確認しようとしたのですが、他の車が邪魔をしてきちんと見ることができず、とうとう相手に逃げられてしまいました。

仕方なく家に帰った私は、妻にその旨を話しました。最初は冷静だったのですが、だんだん抑えていた感情が湧き出てきます。

しまいには「どこのどいつだ」「ふざけんな」「ばかやろう」と汚い言葉のオンパレードになり、その後仕方なく車屋さんに行き、修理をお願いしました。

幸いにもお金のかからない範囲できれいに直ったので、私の機嫌も治まったのですが、問題はその後でした。家に帰って子どもたちの顔を見た時、この子たちはさっきまで罵声をあげている父親を理由もわからずに見ていたんだ、と気づきました。

そしていかにも「さっきのお父さんは本当のお父さんじゃないぞ」という素振りを見せ、急に子どもたちに優しくなっている都合の良い自分にはため息が出ました。

煩悩は、代表的なものに「欲」「怒り」「愚痴」がありますが、まさしくその煩悩を持っているのが私たちであり、車の傷ひとつで子どもに醜い姿をさらけ出してしまうのがこの私なのだと痛感させられました。

そんな私たちに親鸞聖人は

煩悩にまなこさへられて
摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて
つねにわが身をてらすなり
（高僧和讃）

と、煩悩という色眼鏡をかけて物事を見ている私たちは、阿弥陀如来の救いのおはたらきに気づくことができませんが、私を救おうとしてくださる広大な慈悲は、怠ることなくこの私に向けられているのです、とご和讃に書いておられます。

いつどこでも、私たちは阿弥陀如来の深いお慈悲に照らされていることを親鸞聖人は教えてくださいました。

振り返ってみると、私が罵声をあげていたあの時、阿弥陀如来は子どもたちを通して「気づけよー、気づけよー」とはたらいてくださっていたのかもしれません。

報恩講には、そんな浄土真宗のみ教えを明らかにしてくださった親鸞聖人のご恩を偲び、阿弥陀如来に手を掌わせ、皆さまとともに仏縁を深く味あわせていただきたいと思っています。

住職とともに
10月13日　仏壮定例会にて

## ご報告

この春から、茨城県牛久市にある少年院、茨城農芸学院の教誨師師となりましたことを、ご報告させていただきます。

教誨師とは、矯正施設の受刑者などに対して徳性教育をし、改心するように導く仕事です。

## 門信徒会会長就任にあたり

手島　光一

前会長・福田市男さまの突然のご逝去に伴い、平成二十八年五月から空席となっておりました、宗願寺門信徒会会長の重責を担うこととなりました手島です。

宗願寺門信徒の皆さまには、日頃より、お寺に対して多大なるご支援、ご協力を賜っており、世話人として有難く存じておりました。

そんなある日、ご住職から門信徒会会長の役を引き受けていただけないか、とのお話がありました。

前会長初め、歴代の会長は、お寺の護持発展に多大なご貢献をなされた方々ばかりであり、私がその任に就くことは恐れ多いです、と一旦はご辞退申し上げました。

しかし、ご住職と話し合い、説得され、職を全うすることができるかどうか甚だ心もとないのですが、少しでもお寺のお役に立てればとお引き受けした次第です。

今後は、宗願寺の歴史と伝統を守り、発展させるべく、皆さまのご指導とご協力をいただきながら、かつ、お寺との密接な連絡提携のもと、その職責を全うしてまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

重ねて、今後とも宗願寺へのご協力をお願い申し上げ、と挨拶といたします。

門信徒会の会長は、常日頃※聴聞し、お寺の行事にも率先して働いてくださっている壮年会のどなたかに務めていただきたいと考えていました。

壮年会の会員である手島さんは、前々住職・弘三法師がかわいがっていた半世紀前の青年会のメンバーのひとりです。現在、病の床にある母が「あの子たちの中からお寺のリーダーが出てこないと……」と口癖のように語っていたことを思い出します。

何度もお願いして、お引き受けいただきました。皆さまの支えが大切です。ご協力、よろしくお願いいたします。

※「聴聞」とは仏さまのお心を聞いていくこと。（由真記）

## お知らせ

**成道会**
12月9日（日）
法要　午前11時半
バザー　正午
コンサート　午後1時半

**修正会**
1月1日（火）　午前10時

**御正忌報恩講**
門信徒会新年会
1月13日（日）　午前11時

**立春拝賀式・仏婦新年会**
2月4日（月）　午前11時

# 母のこと

井上　由真

今年も、報恩講の仏教讃歌やお勤めを、母は隣の部屋で聞いていることになると思います。

この原稿を書いているのは、十日前になる十七日です。十三日の午後、容態が急変して往診していただき、点滴と酸素吸入、現在肺炎の治療中です。その時は、もうこれまで、と覚悟したのですが、その後大分落ち着きました。

五月の入院中、弱ってしまった母を見て、父や祖母の亡くなった六月に仏さまになってしまうのではないか、と考えたりしました。

六月一日に退院して、その後はヘルパーさん、往診のお医者さまや看護師さん、入浴サービスの方々、手厚い介護を受けながら、在宅で療養しています。

「病院も施設も絶対に嫌」と言う母は徐々に元気を取り戻し、面白いことを言って私たちを笑わせたりするようにもなりました。

「あたしもう死ぬわよ、あんたお葬式ちゃんとできるの？」と威張ったり、食事中「こら！」と突然私の手を叩いて「猫が私に乗ってる」と騒いだり。ベッドが燃えていると一生懸命火を消そうとしていた時は、私も一緒になって見えない火の消火作業をしました。

人が好きな母がお嫁に来て、このお寺は賑やかになりました。毎日来客が絶えず、一緒にお茶を飲んだり食事をしたり。ご門徒さんも増えました。

父は一生働きました。その前には祖母が教師をしてお寺を支えました。そんな経営状況の中、台風で大木が倒れ、お墓を壊し、急に大金が必要になって銀行に借金に行ったけれど、なかなか貸してもらえなくて途方に暮れた、と、その話をよくしていました。

本当は音大に行きたかった、とクラシック音楽が大好きだった母は、お寺での仏教讃歌の普及に尽力しました。孫である住職が、仏教讃歌の指導をするようになった時は、母の夢が叶ったと嬉しく思いました。

仏前結婚式で法話をする母（80歳）

一週間くらい前の朝、私に対してはいつも厳しい言葉をかける母が「こんなによくお世話してもらってありがとうね」と言い出しました。驚いた私が「どうしちゃったの？」と尋ねると「こういうことは言える時に言っておかないと」と答えるのです。

その後、いつもの母に戻ったのですが、なんとなく気になる言葉でした。

今朝はうわ言のように蓮如上人について話していました。また、「宗願寺に行けば、他では聞けない話が聞けるのよ」とも。

いつ何があっても受け入れる覚悟はしているつもりですが、母の容態が悪化するたびに動揺し、良くなるとホッとする、その繰り返しです。

皆さま方には、母を心配する言葉を常に頂戴し、感謝しています。

## 成道会バザーについて

十二月九日（日）正午より、恒例のバザーが開かれます。

仏婦は、手作りケーキやお惣菜、おはぎ等販売いたします。

仏壮は焼きそば、竹細工等販売いたします。特に、長い靴ベラが、足の悪い方への贈り物として、好評です。

編物教室は帽子やベスト等、手編み製品を用意しました。

無農薬野菜、手打ち蕎麦、石窯で焼いたピッツァ、美味しいです。

どうぞ、遊びに来てください。

※バザーへの不用品持ち込みは、一週間前までにお願いいたします。

**仏教壮年会**
第2土曜日　午後6時

**仏教婦人会**
16日　午後1時

**編物教室**
第2・第4火曜日　午前10時

**宗願寺合唱団の練習**
第3日曜日　午後1時半

## 彩弥（さや）と弥那（みな）との日々

いつも一緒

弥那は一歳三ヶ月になり、トコトコ歩き始めました。

いつもお姉ちゃんにくっついたりおもちゃに手を伸ばしたりするので、彩弥は迷惑がるのですが、それと同じくらい仲良く遊ぶ時間も増え、どんどん広がるふたりの世界に、私も発見の毎日を過ごしています。

先日は、彩弥が台所の水道を全開にして弥那がそれを大皿で受け止め、部屋中に水を飛び散らせていてびっくりしました。もちろんふたりともこってり叱られました。

そんな彩弥も三歳を過ぎ、来年は幼稚園の年少組です。園を決める際にはいくつかの幼稚園を見学しましたが、大切なのは子どもの成長する力を信じることだという結論に至り、歩いて通える近所の幼稚園に決まりました。

母親としては、何かと神経質になってしまいがちですが、自力の限界もまた大きなご縁の中で生かされていると心に留めて、子どもと一緒に成長していけたらと思います。

（明寿子記）

## 編集後記

千代田女学園の先輩である樹木希林さんが亡くなられました。彼女の最後が見事であった、とか、その残された言葉が素晴らしいと報道されています。

私から見るととても仏教的な言動が、新しい発見のように讃えられるということに、違和感のようなものを覚えます。人々の日常から、本物の仏教が遠くなってしまった表れのような気がして。

今年の異常気象は、境内の植物たちにも影響を及ぼしました。それでもギンナンは沢山収穫でき、報恩講のお料理に使うことができます。

十六日の仏婦の定例会では、昆布を切ったりギンナンの殻をむいたり、報恩講のお斎の準備をいたしました。

何があっても、ちゃんとお勤めしたいと思います。

八十九歳の「いのち」を一生懸命に生きる母に、音楽法要や皆さんのお勤めを聞いて欲しいなぁ……と。

今年は特にそう思っています。

合掌

発行・宗願寺門信徒会
編集責任者・井上由真（由美子）
カット・大建弘子
（印刷所・阿部印刷）